

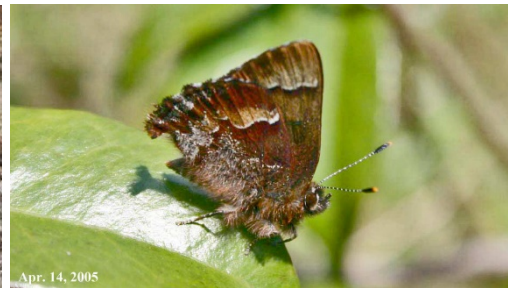
早春の野山で出会って春を実感できるチョウが何種類かありますが、ぽかぽか陽気の里山でコツバメに出会えると「春だなあ」と感無量となります。近隣で春だけしか見られないチョウは何かと聞かれた場合、ギフチョウやツマキチョウがすぐ浮かぶ名前ですが、どっこいこのコツバメを忘れてはなりません。姿形がとても小さく色もきわめて地味で、早春の山道では路傍の小枝や葉っぱの先にちょこんととまり、人の気配に驚くと鋭敏に跳ねとんですぐに別の枝葉の先端などにとまるのですが、その飛翔時はまるでハエがとんでいるようにしか見えない、そんなチョウで、北海道から九州まで各地に普通に分布していますが北海道の山地では7月になっても新鮮個体がみられるそうです。



チョウを知らない人がワラビなどの山菜採りに山に入るとき必ず出会っているはずなのに、おそらくハエが飛んでいたなとしか認識していないでしょう。早春の里山に点在するアセビの白い花や、ツツジの花群間を敏速に飛び交うこのコツバメに、あるいは早春の山道を歩いているときにパッと路傍の小枝などから飛び立つ本種がチョウだと気がつ

いた人がいれば、その人の注意力はきわめて優秀とって間違いありません。

コツバメは静止状態で太陽光線が翅面に直角にあたるように体を傾けて日光浴をする、とても変わった、しかし実に賢い習性があります。その間、左下の図のように後翅だけを上下に動かすシジミチョウの仲間がよくする所作を見せますが、決して羽を広げてはくれないのでチョウの撮影を趣味とする人が最もストレスをためる相手といえます。何度もチャレンジをして、結局は裏面の芸術模様がしっかりと撮れたからいいやと諦めてしまう、



実際は、しぶいブルーの翅表をもっているのに実に愛想のないチョウだといえます。ここに示す静止時の撮影記録は、裏面の芸術的な模様をしっかりと捉えることができた会心の作として満足しているものです。

コツバメの幼虫はスイカズラ科のガマズミやネジキやヤマツツジ、コバノミツバツツジなどのツツジ類の花を食べて育ち、晩春には蛹となってそのまま翌春まで過ごしてチョウになりますが、このパターンはギフチョウとよく似ています。2014年の4月、加古川市郊外の岩山山頂部で、アセビによく似たネジキの新芽付近に次々と産卵してまわるコツバメの母チョウの記録を撮りましたが、それ以降の生態観察はできていません。

